第3章　後　論

第1節　近畿地方北部の古式須恵器
―奈具岡遺跡出土須恵器の検討を通じて―

山　田　邦　和

はじめに　奈具岡遺跡からは，今回の調査によって，17点の須恵器が出土した。そのうち，Ⅰ期に編年できるものは6点ある。近年，京都府北部・兵庫県北部においても古式の須恵器の出土例が増加し，それへの関心も高まっているところである。そこで，本稿では，同地における古式須恵器の様相を概観し，その意義づけを試みる。

なお，編年については，須恵器編年のⅠ期を三つに大別し，古い方から，Ⅰ前期・Ⅰ中期・Ⅰ後期と呼ぶ。Ⅰ前期は田辺昭三氏編年のＴＫ73型式に，Ⅰ中期はＴＫ216型式・ＴＫ208型式に，Ⅰ後期はＴＫ23型式・ＴＫ47型式に，それぞれ該当する。これは，須恵器編年の大要をとらえるための呼称である。細分を要するばあいには，（古・新）をもってあらわす。また，「古式須恵器」とは必しも適切な用語ではないけれども，本稿では慣用に従い，Ⅰ期の須恵器の総称として使用する。

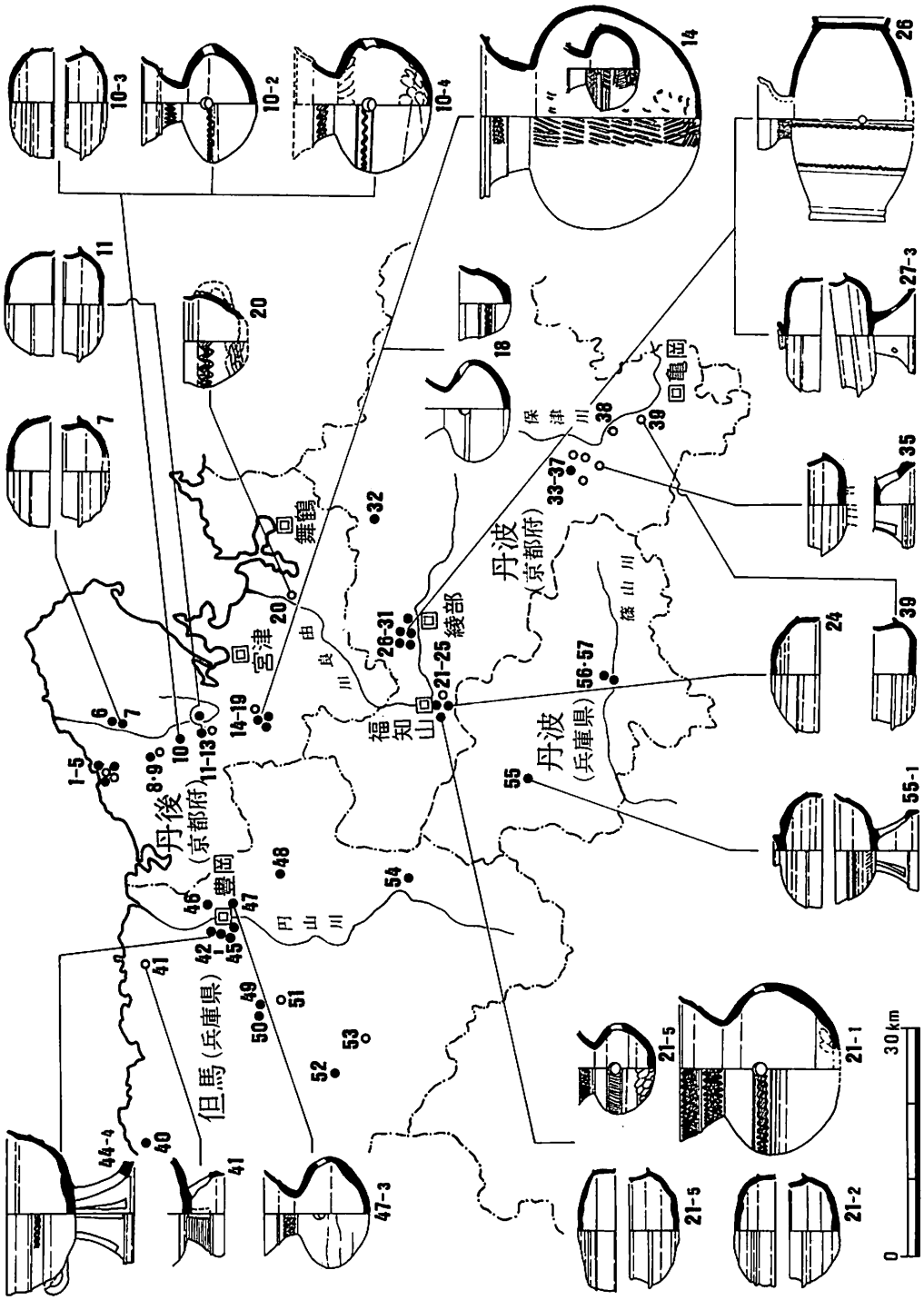
奈具岡遺跡の須恵器　奈具岡遺跡出土の須恵器でⅠ期に属するものは，南尾根古墳出土の杯蓋(第15図6)，Ｓ11号土壙出土の杯蓋・杯身・高杯(第22図)である。これらの須恵器は，いずれもⅠ後期(古)に属する型式的特徴を備えている。

第15図6の杯蓋は，稜が鋭く突出し，口縁部内面の段は水平に近い。天井部の回転ケズリ調整は丁寧である。これらは，Ⅰ後期(古)の中でも古い要素である。第22図3の杯蓋は，口縁部内面の段が内傾する点に，やや新しい要素をもつ。第22図2に至ると，稜はほとんど突出せず，回転ケズリ調整もやや粗雑になる。器形もシャープさを失い，丸みをおびる。これらはⅠ後期(古)としても後出の特徴である。

杯蓋と杯身は，第22図3が4と，同図2が5と，それぞれセット関係をなす。同図4の杯身は，5に比して体部が浅い。回転ケズリ調整も，4が丁寧である。器形の点でも，4はシャープであり，5は丸みをおびる。これらの点は，セットになる杯蓋の型式的特徴と，それぞれ一致している。

無蓋高杯(第22図1)は，杯部に二条の稜と波状文をめぐらす。脚部には台形の透しを三方にあける。型式的には，第22図3・4の蓋杯に併行するものであろう。

以上のように，奈具岡遺跡南尾根古墳・Ｓ11号土壙出土の須恵器は，同一様式に属しながら，わずかに新古の型式的特徴を有している。



第34図　近畿北部のⅠ期須恵器出土遺跡分布図（遺物は縮尺7.3分の1，●は古墳　○はその他の遺跡）

第3表　近畿北部のⅠ期須恵器出土遺跡地名表

番号	名称	所在地	時期
京都府竹野郡網野町			
1	向地遺跡	浅茂川	Ⅰ後
2	岡3号墳	小浜	〃
3	勝山古墳		〃
4	二村遺跡	浅茂川	〃
5	林遺跡	林	〃
京都府竹野郡弥栄町			
6	奈具岡遺跡	溝谷	Ⅰ後
7	いもじゃ古墳	〃	〃
京都府中郡峰山町			
8	細谷古墳	安	Ⅰ後
9	途中ケ丘遺跡	長岡	〃
京都府中郡大宮町			
10-1	小池1号墳	口大野	Ⅰ後
-2	2号墳		Ⅰ中
-3	5号墳	善王寺	Ⅰ後
-4	7号墳	〃	Ⅰ中
-5	10号墳	〃	Ⅰ後
11	光明寺裏山古墳	奥大野	〃
12	裏陰遺跡	〃	〃
13	大宮売神社遺跡	周只	Ⅰ中
京都府与謝郡加悦町			
14	中上司遺跡	温江	Ⅰ中
15	湯の谷	〃	Ⅰ後
16	御陵古墳群	御陵	〃
17	須代神社		〃
18	伝・白米山古墳周辺	後野	Ⅰ中
19	嶋1号墳		Ⅰ後
京都府舞鶴市			
20	桑飼下遺跡	桑飼下	Ⅰ中
京都府福知山市			
21	豊富谷丘陵古墳群	笹尾今安	
-1	大道4号墳	〃	Ⅰ中
-2	5号墳	〃	Ⅰ後
-3	13号墳	〃	〃
-4	18号墳	〃	Ⅰ前
-5	論田12号墳	〃	Ⅰ中・後
-6	大道寺跡	〃	Ⅰ中
22	後青寺古墳	大内	Ⅰ後
23	向野古墳群	正明寺	〃
24	武者ケ谷2号墳	岡	〃
25	洞楽寺遺跡	大内	〃
京都府綾部市			
26	以久田野古墳群	栗	Ⅰ中・後
27-1	高谷3号墳	館町	Ⅰ後
-2	5号墳	〃	Ⅰ中
-3	6号墳	〃	Ⅰ中・後
28	中山古墳	鍛治屋町	Ⅰ後
29-1	田坂野3号墳	小呂町	〃
-2	5号墳		〃
30	前田6号墳	小西町	〃
31	豊里中学校内		〃
32	神林城跡	八津合町	〃
京都府船井郡園部町			
33	上木崎古墳	上木崎	Ⅰ後
34	岩谷サイズ遺跡	岩谷	〃
35	園部窯址群	小山西町	〃
36	曽我谷遺跡	曽我谷	〃
37	善願寺遺跡	善願寺	〃
京都府船井郡八木町			
38	八木中学校蔵		Ⅰ後
京都府亀岡市			
39	千代川遺跡	千代川町	Ⅰ中
兵庫県美方郡浜坂町			
40	水神山1号墳付近	対田	Ⅰ
兵庫県竹野郡竹野町			
41	鬼神谷窯址群	鬼神谷	Ⅰ後
兵庫県豊岡市			
42-1	下陰5号墳	下陰	Ⅰ後
-2	6号墳	〃	〃
-3	9号墳	〃	〃
43	矢谷1号墳	福田	〃
44-1	七ツ塚1号墳	正法寺	〃
-2	2号墳	〃	〃
-3	6号墳	〃	〃
-4	7号墳	〃	〃
-5	8号墳	〃	〃
45-1	亀ケ崎1号墳	森津	〃
-2	1-1号墳	〃	〃
-3	2-1号墳	森津	Ⅰ後
46	鎌田東3号墳	下宮	Ⅰ中
47-1	北浦9号墳	森尾	Ⅰ後
-2	15号墳	〃	〃
-3	17号墳	〃	Ⅰ中
-4	24-2号墳	〃	Ⅰ後
-5	28-5号墳	〃	〃
兵庫県出石郡出石町			
48	小野小学校裏山古墳	小野	Ⅰ後
兵庫県城崎郡日高町			
49	訓原古墳群	神鍋	Ⅰ後
50	下山古墳	水口	〃
51	森山遺跡	森山	Ⅰ中
兵庫県美方郡村岡町			
52	伝・八幡山6号墳	福岡	Ⅰ後
兵庫県養父郡関宮町			
53	関宮寺野山遺跡	関宮	Ⅰ後
兵庫県朝来郡和田山町			
54	経塚古墳	宮	Ⅰ後
兵庫県氷上郡山南町			
55-1	丸山3号墳		Ⅰ後
-2	4号墳		〃
兵庫県多紀郡篠山町			
56	西山北古墳		Ⅰ後
57	北野今寺1号墳		〃

近畿地方北部の古式須恵器出土遺跡　近畿地方北部の須恵器研究は，従来，それぞれの地域において成果がまとめられてきた。古墳出土の古式須恵器については，杉原和雄[1]が丹後および丹波北部のものを，瀬戸谷晧[2]が但馬のものを，それぞれ集成した。須恵器窯については，加賀見省一[3]が但馬の，杉原和雄[4]が丹後および丹波北部の，筆者[5]が丹後・丹波を含む京都府下のそれを，それぞれ概観している。

さて，丹後・丹波・但馬において，Ⅰ期の須恵器を出土した遺跡を集成したものが，第34図および第3表である。以下，両図表の示す結果に注目していきたい。

この地域においてⅠ期の須恵器を出土した遺跡は，多くが古墳である。そうして，出土古墳は，京都府小池古墳群・同府豊富谷丘陵古墳群・兵庫県北浦古墳群・同県七ッ塚古墳群などにみられるように，規模が小さく，群在し，棺直葬を内部主体とすることがほとんどである。すなわち，Ⅰ期の須恵器は，これら初期群集墳にともなうことが最も多い。

そのばあい，須恵器は，すべてが埋葬祭祀，もしくは墳丘上祭祀に使用されたものであり，棺内または墓壙内に副葬された例はほとんどない。近畿地方北部で，須恵器の棺内・墓壙内副葬の普及は，Ⅱ期にはいってのことである。

古墳以外の遺跡としては，集落址・祭祀遺跡・窯址がある。集落址には，Ⅰ中期のものとして京都府千代川遺跡・同府中上司遺跡・同府桑飼下遺跡などが，Ⅰ後期のものとして同府林遺跡・同府裏陰遺跡などが，それぞれあげられる。出土遺跡の数は，Ⅰ後期にはいって増加する。祭祀遺跡としては京都府大宮売神社遺跡が，窯址としては同府園部窯址群・兵庫県鬼神谷（おじんだに）窯址群が，それぞれ存在する。

近畿地方北部の古式須恵器　ここでは器種別に叙述を進めたい。まず，蓋杯について述べる。管見にふれる限りで，近畿地方北部の最古の須恵器は，京都府豊富谷丘陵古墳群の大道18号墳から出土した杯蓋である。この杯蓋は，天井部が扁平で，口縁部は丸くおさめ，稜は厚く丸い。天井部は回転ケズリ調整の上に回転ナデ調整を施す。こういった点でⅠ前期に比定できる。Ⅰ中期(新)のものとして，同古墳群の論田12号墳の出土例がある。つくりは丁寧で，シャープな印象を与える。Ⅰ後期にはいると，蓋杯の出土例は増加する。奈具岡遺跡S11号土壙もその一例である。

瓶には，大型・小型・樽形の各種がある。Ⅰ中期には瓶が多く，Ⅰ後期にはそれにかわるかのように，蓋杯が増加する。大型瓶は小池7号墳・大道4号墳・京都府中山古墳・同府高谷6号墳などから出土した。前二者はⅠ中期に，後二者はⅠ後期に属する。樽形瓶は兵庫県森山遺跡・京都府以久田野古墳群から出土した。これらもⅠ中期の所産である。とくに，前者はⅠ中期(古)に属し，但馬地域での最古の須恵器である。小形瓶は，Ⅰ中期のものが小池2号墳・兵庫県北浦17号墳・京都府伝白米山古墳周辺・などから出土した。伝白米山古墳周辺例は無文であり，また，北浦17号墳例は頸部に，小池2号墳例は頸部および体部に，それぞれ波状文を施す。Ⅰ後期の小型瓶は，論田12号墳・北浦15号墳・兵庫県小野小学校裏山古墳などの例を数えることができる。

高杯には，有蓋・無蓋の両者がある。有蓋高杯では，京都府高谷6号墳の出土例が注目される。同墳からは10個の有蓋高杯が出土しており，うち2個はⅠ中期(新)に，8個はⅠ後期(古)に属する型式的特徴を示す。脚部の透しは，前者が小さな正方形，後者が円形をそれぞれ呈する。

椀はⅠ中期に盛行する器種である。近畿地方北部では，京都府桑飼下遺跡・同府伝白米山古墳周辺・兵庫県七ッ塚8号墳などの出土例がある。

小型甕には，京都府中上司遺跡・兵庫県鎌田東3号墳などの出土例がある。両者ともに，Ⅰ中期に属する。前者は集落址の方形ピットにおさめられた状態で出土した。

須恵器生産の開始　近畿地方北部において知られる最古の須恵器窯は，丹波の京都府園部窯址群・但馬の兵庫県鬼神谷窯址群である。ただ，丹後でも，京都府中上司遺跡出土の小形甑(Ⅰ後期・古)は，底部にハケ調整を施すことなど，形態・手法の特徴が特異である。これが，大阪府南部窯址群など畿内の窯の製品でないとするならば，近畿地方北部にもⅠ中期に遡る窯址が存在する可能性を考えねばなるまい。

園部窯址群では約30基の窯址を確認しており，その下限は平安時代におよぶ。同窯址群で知られる最古の窯址は，Ⅰ後期(新)に属する。しかし，古墳出土資料の中には，同窯址群の操業がⅠ後期(古)にまで遡ることを示す証拠がある。同窯址群には，須恵質・土師質両埴輪を焼成した埴輪窯(徳雲寺埴輪窯)も存在する。同埴輪窯址の時期は円筒埴輪編年のⅤ期であり，園部窯址群の初現期にあたることが知られる。

園部窯址群にやや遅れて，丹波北部も須恵器生産を開始する。京都府福知山市猪崎の賀茂野窯址群がそれである。Ⅱ前期とⅡ後期の資料が採集されている。

但馬最古の須恵器窯址は鬼神谷窯址群である。操業はⅠ後期(古)にはじまり，Ⅲ初期におよぶ。これに次ぐ時期の窯は，養父郡関宮町三宅の中山窯である。この窯の須恵器は，Ⅱ前期に比定しうる。

これらの須恵器窯が，どこまでの範囲を供給圏としていたかについては，明確な解答を与えがたい。しかし，現段階の資料では，園部窯址群は少なくとも丹波全域に，鬼神谷窯址群は少なくとも但馬東北部に，それぞれその製品を供給していたと考える。賀茂野窯址群のばあいも，近傍に，Ⅱ前期に築造の中心がある福知山市猪崎の稲葉山古墳群が存在し，須恵器の供給を行なった可能性を指摘できる。もっとも，両窯址群が操業を開始してからも，畿内からの須恵器の搬入が停止したのでないことは，兵庫県七ッ塚6号墳出土須恵器(Ⅰ後期・古)が，胎土分析によって大阪府南部窯址群の製品とされたことからも，知られる。

古式須恵器と初期群集墳　近畿地方北部では，木棺直葬などを内部主体とする小規模古墳が，群在して築造されている。ただしこの傾向は，丹後・丹波北部・但馬北部においてとくにいちじるしく，丹波南部・但馬南部ではやや顕著でないようである。

これら初期群集墳の築造は，古墳時代中期後半から後期前半にかけて，とりわけ著しい。兵庫県鎌田東古墳群などのように，その初現が前期の終わりにまで遡るものもあるけれども，一

般的な群形成のピークは中期以降にある。また，京都府豊富谷丘陵古墳群・同府小池古墳群などには，群の一画に弥生時代もしくは古墳時代前期前葉の台状墓群が含まれるが，それら台状墓群と初期群集墳の間には，年代上の断絶がある。

中期後半にはいり，我が国で須恵器生産が開始し，やや時をおいて，近畿地方北部にも須恵器が搬入される。須恵器を受容した階層の問題を考えるばあい，京都府小池古墳群の調査結果[6]が興味深い。同古墳群は，総数約60基の円墳および方墳からなる初期群集墳で，うち11基を発掘調査した。古墳以外にも，古墳と併行する時期の土壙墓群を検出し，同古墳群の被葬者集団の階層構成を推測できる。そうして，11基の古墳中7基から須恵器が検出されたのに対して，土壙墓から須恵器が出土した例はない。これは，古式須恵器の所有に，階層による差があったことを示唆する。あるいはこれをもって，当地において須恵器がまだ貴重品であったとする意見があるかもしれない。しかし，近畿地方北部の古式須恵器出土遺跡のかなりの部分を初期群集墳がしめていることに注目するならば，初期群集墳の祭祀が，とくに須恵器をもちいる祭祀であったと想定することもできる。Ⅰ中期の初期群集墳出土須恵器に甑の例がめだち，Ⅰ後期にいたって蓋杯が増加するのも，初期群集墳での祭祀の変化にともなうものと考えたい。すなわち，中期後半から後期前半にかけての近畿地方北部では，初期群集墳の祭祀と古式須恵器は，密接に関連していたといいうる。

近畿地方北部の須恵器生産は，現状ではⅠ後期を遡らない。したがって，それより前の須恵器については他地域からの搬入を想定せざるを得ない。そのばあい，供給の大きな部分は，畿内の製品が占めていたと判断する。これは同時に，初期群集墳の被葬者が，須恵器を通じて，畿内との間にむすびつきをもっていたことを示す。

さて，丹後には，前期から中期のはじめにかけて，全長100mを超す大型の前方後円墳が，少なからず築造されたことが知られている[7]。竹野郡網野町網野の網野銚子山古墳(198m)，同郡丹後町宮の神明山古墳(190m)，与謝郡加悦町明石の蛭子山古墳(132m)などがそれである。しかし，中期後半をまたずに，丹後から大型前方後円墳は姿を消す。いっぽう，中期前半以降，近畿北部の多くの地域で初期群集墳が増加する。同地の初期群集墳は，規模が近く，出土遺物も，須恵器・土師器・鉄製農工具・鉄製武器(鏃・刀)などであって，等質的なあり方をしめす。

以上の諸点は，中期において，近畿地方北部に政治的な変動があったことを示す。そうして，この変動とは，前期丹後勢力の退潮のあとをうけ，畿内政権が直接に初期群集墳の被葬者たちを組織する体制が成立したものと推測する。これは，『日本書紀』雄略17年3月条に記された，贄土師部を丹波・但馬などに設置するという記事とも，あるいは関連するのかもしれない。また，同地の初期群集墳が攻撃用鉄製武器をしばしば副葬していることは，この体制が一面では，畿内政権による軍事動員の性格を有していたことを意味しているのかもしれない。

そうすると，近畿北部の初期群集墳が古式須恵器をもつことも，単なるものの搬入として理解することは適当でない。それらは，初期群集墳の被葬者に対して畿内政権が分与したものであり，分与の目的は，初期群集墳で祭祀に使用することを主としたと考える。それは，新たな

古墳祭祀の枠組みによって，彼らを組織づけるものであったろう。

しかし，畿内から分与というかたちで須恵器が搬入された時期は，そうながくはなかった。後期前葉にはいり，園部・鬼神谷両窯址群が，在地の須恵器窯として操業を開始し，近畿地方北部に対する須恵器の供給の一部を受けもつことになる。これは，同地における須恵器需要の増大にともない，畿内から工人が派遣されたものであったと考える。

近畿地方北部の古式須恵器の搬入と須恵器生産の開始には，以上の政治的・社会的背景が存在していたことを強調しておきたい。

本稿執筆および資料収集のうえで，以下の諸氏・諸機関から御協力を賜わった。記して謝意を表したい。

㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター・京都府立丹後郷土資料館・綾部市教育委員会・与謝郡加悦町教育委員会・杉原和雄・佐藤晃一・安藤信策・中村孝行・松井忠春(順不同・敬称略)

第2節　ま　と　め

遺物として弥生時代前期から古墳時代後期に及ぶ広範な時期のものを検出した。また，遺構については，方形周溝墓，土壙墓，古墳，住居址，ピット群の存在を確認した。方形周溝墓は4基を数える，南尾根の方形周溝墓3基は，いずれも埋葬施設の検出には至らなかったが，溝内出土の土器からみて，庄内式併行期にあたる。同期が古墳時代に入るのか，弥生時代にとどまるのか，見解の一致をみない。古墳時代の開始のメルクマールとして，古墳という営造物の出現あるいはそこで実修されたと空想する首長権継承儀礼の創造を重視しようとする意見があり，また，古墳に葬られるべき有勢者による新しい文化活動の創出に注目する視点もある。葬送の問題よりも，存命中の文化活動を重視する立場からいえば，S2号方形周溝墓北溝内出土の定角式鉄鏃はあきらかに古墳時代に属するので，溝中の土器は土師器となり，この方形周溝墓も同期に入ることになる。いずれにせよ，丹後における古墳時代開始期を土器様式の変遷のなかで位置づけるうえで，この鉄鏃の資料的価値は少なくない。

住居址6基のうち時期の推測しえた3基は貯蔵用ピットをそなえ，古墳時代前期〜中期に属する。貯蔵用ピットを設けた類例は，近傍では，京都府綾部市青野町青野遺跡にあり，このばあいは，弥生時代中期末から後期，および古墳時代中期の各住居址で確認されている。奈具岡遺跡のばあい，貯蔵用ピットが住居址の南または東の側壁にあることは，平地から吹きあげる冬の強い北西風を避ける処置であるのかもしれない。ちなみに，京都市山科区西野山・勧修寺の中臣遺跡においても，貯蔵用ピットは住居址の東〜南壁側に集中する傾向がある。また，S1，S3号住居址で間仕切り用とおぼしき小溝を確認した。屋内の小溝は，畿内では弥生時代中期の円形住居址にさかのぼってみられるが，古墳時代前期の方形住居址で本遺跡でみられるような配置をもつ例を近畿では知らない。

古墳時代中期末または後期初頭にあたる古墳1基，土壙1基を検出した。これは，住居の廃絶後，奈具岡がふたたび墳墓の地として利用されたことを物語る。両丹地方では，同期に木棺直葬の小円墳の増加することが説かれている。たとえば隣接する加悦谷でも，その増加が著しく，京都府中郡大宮町口大野小池古墳群の様態もまたこれを証示する。奈具岡でふたたび墳墓を営むに至ったのは，両丹地方におけるこの現象とおそらく軌を一にするのであろう。

さて，弥生時代後期において，丹後は，土器の面で，山陰から北陸に及ぶ擬凹線文地帯に包括され，また，墓制の面でも，平野をのぞむ尾根や丘陵上におびただしい数の方形台状墓または方形周溝墓を営む点で，山陰，北陸方面との共通性が強い。そのなかで，与謝郡野田川町比丘尼城で突線鈕5式銅鐸が，舞鶴市下安久で突線鈕3式の近畿式鐸，および三遠式鐸が発見されており，また，丹波ではあるが，福知山市長田野宝蔵山古墳群などで近江系土器が散見される。なお，弥生時代後期に近江・東海系土器の影響が少なくない福井県の南越盆地でも，三遠式の前身という銅鐸が発見されている。その意味で，丹後以東の後期文化を考えるばあい，いわゆる日本海文化圏に包括される山陰方面との共通性に加え，近江・東海系文化の影響を念頭におくべきであろうと思う。

話を戻すと，丹後にはじめて古墳文化の成立をみるのは，畿内よりも半世紀ほど遅れるようである。4世紀後半に比定される，中郡峰山町杉谷カジヤ古墳，与謝郡加悦町の白米山，蛭子山両古墳，同郡岩滝町岩滝丸山古墳などを嚆矢とし，ついで4・5世紀の交を中心に，竹野郡網野町網野銚子山古墳，同郡丹後町宮神明山古墳，同郡弥栄町黒部銚子山古墳などの営造をみる。この間半世紀ほどは，丹後におけるいわば大古墳の時代であり，前方後円墳として全長198mをはかる網野銚子山古墳，全長190mの神明山古墳の規模は，畿内の同期の大型古墳に匹敵する。これは，前期畿内政権下における丹後の重要度が並々でなかったことを物語っている。

可耕地に乏しい丹後の地で，短期間に陸続と大型古墳の営造をみたことについて，被葬者達の強大な勢威の淵源を，日本海域における海上活動の管掌という面から説明しようとする試みがある。4世紀後葉に至り前期畿内政権による朝鮮との通交活動が頻繁の度を加えたという時代の背景を勘案するならば，この仮説は特筆にあたいする。このばあい，舞鶴市伊佐津切山古墳出土の鉄鏃に，大陸では北方系に属する一種の鑿頭式鏃が含まれていることは，注目しうるかもしれないが，上記の古墳で副葬品の内容の判明したものがなお一部に限られ，その面から被葬者達の活動の軌跡をたどる作業は多く今後に残される。

中期に入ると，前方後円墳の営造が急激に衰退し，規模の比較的大きい古墳としては，直径50mの円墳である竹野郡丹後町竹野産土山古墳，直径30mの円墳である竹野郡弥栄町鳥取ニゴレ古墳などがあるにとどまる。そのいくつかで副葬品の内容が知られており，そこで大陸とのつながりを示唆する器物をあげるとすれば，産土山古墳では，漢の環頭大刀の文様に系譜をもつ環頭刀子，甲冑などの武具類，ニゴレ古墳の武具類がある。いずれにしろ，中期畿内政権のもとでは丹後の重要性は著しく低下したことは疑いない。

ところで，北陸地方をみると，若狭では西塚古墳，越前では向出山1号墳，天神山古墳，二

本松山古墳，加賀では狐山古墳，和田山5号墳など，大陸系器物や甲冑を副葬品とする古墳が少なからず分布し，これらの古墳は概ね5世紀中葉〜後半に比定される。前期畿内政権のもとでは，日本海側において，丹後の豪族が大陸へ通ずる海上活動のゆえに著しく重用されたとすれば，中期畿内政権下では，かわって北陸の豪族が通交活動を主掌するに至ったのであろう。

大型古墳の時代を終えた丹後には，つづいて，木棺直葬の小円墳をさかんに営む群集墳の時代がはじまる。この種の群集墳を初期群集墳と呼んで分離するならば，たとえば奈良県橿原市新沢千塚などの形成から知られるように，畿内でもまた，ほぼ近い時期から初期群集墳の形成が隆盛をむかえる。そこで，丹後における初期群集墳のさかんな形成活動を畿内の事情と関連づけてよければ，これは後期畿内政権下の地方経営の問題として説明しうる。すなわち，群集墳の被葬者達を組織した有力勢力が構成の一翼を担い，官司制的専制体制として特色づけうる後期畿内政権下において，丹後では，有力勢力を介さずに広範な階層を組織する地方経営の新しい方策が進展をみたことになるのである。

注

1）杉原和雄『丹後地方における横穴式石室採用以前の須恵器資料』（『水と土の考古学』所収，京都，昭和48年）。

2）瀬戸谷晧『但馬出土の初期・古式須恵器について』（『七ッ塚古墳群』所収，豊岡，昭和53年）。同『但馬地域』（『日本陶磁の源流』所収，東京，昭和59年）。

3）加賀見省一『但馬地方における須恵器生産の展開』（『よみがえる古代の但馬』所収，豊岡，昭和56年）。

4）杉原和雄『京都府北部の須恵器生産について』（『丹後郷土資料館報』2所収，宮津，昭和56年）。

5）山田邦和『京都府下の須恵器窯』（『マムシ谷窯址発掘調査報告書』所収，京都，昭和58年）。

6）鈴木忠司・植山茂編『小池古墳群』（京都，昭和59年）。

7）広瀬和雄・田中彩太・豊岡忠雄・遠藤隆曜『丹後地域の古式古墳』（同志社考古第10号，京都，昭和48年）。